



Title	関部双孔鉄剣の日韓比較研究
Author(s)	ライアン, ジョセフ
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 185-194
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105040
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

関部双孔鉄剣の日韓比較研究

ライアン・ジョセフ

1. 本稿の課題

弥生時代の鉄剣には、関より身部側に二つの孔を穿つもの（「刃関双孔」）があり、目釘の存在から、装具を着装するためと考えられている（図1）。南九州から北関東まで広く分布し、現在確認されているものだけで100本以上が見つかった。X線撮影の普及によりさらに増えるものと見込まれる。すなわち、刃関双孔は弥生時代鉄剣を特徴付ける要素の一つといえる。

刃関双孔は、古くから日本列島独自の意匠とされてきた。大庭康時は刃関双孔をもつ鉄剣について中国・韓半島に類例が認められず、列島産または列島内における再加工を想定した（大庭1986）。池淵俊一も双孔をもつ鉄剣の系譜を列島の銅剣に求めた（池淵2003）。

野島永は、双孔をその位置に基づき、「並列双孔」、「並列四孔」、「斜行双孔」に分類した上で、それぞれの地域性を検討し、並列双孔が九州北部、近畿北部、中部高地、東海に分布するのに対して、並列四孔と斜行双孔が関東に多いことを指摘した（野島・高野2002）。とくに斜行双孔と並列四孔についてその分布が関東周辺に偏在することや、斜行双孔と東日本独自の鹿角製把装具が多く組み合わせることから、東日本における穿孔を想定した。

一方で、豊島直博は、把が双孔まで及ばない例や双孔に目釘を通さない例に着目し、使用しない双孔をわざわざ穿つのが不自然であることから、東日本の刃関双孔鉄剣の中に、双孔を開けた状態で他地域から流通したものが多い可能性を提起した（豊島2003）。また、西日本においても斜行双孔や斜行四孔、並列四孔が少数認められることから、野島が想定した地域性に対しても疑問を呈した。

豊島の見解に影響を受けつつ、森本幹彦や杉山和徳は、東日本を中心に不揃いな孔の開け方や異なる大きさの双孔のセットを取り上げ、消費地における把の付け替えや改修に伴う孔の開け直し、すなわち再穿孔に注目した（森本2007、杉山2020）。

以上のように、刃関双孔鉄剣が列島独自のもの、そして東日本を中心に必要に応じて把装具の付け替えなどに伴う再穿孔も実際行われていたとする見解が通説となっている。一方で、豊島は韓半島の蔚山下垚遺跡から刃関双孔鉄剣が出土していることや、韓半島製と考えられる長野県根塚遺跡

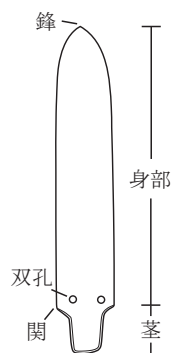


図1 部位名称

の渦巻文装飾付鉄剣にも双孔が穿たれていることから、刃関双孔鉄剣の中に韓半島からの舶載品が含まれている可能性を提起した（豊島 2003）。金跳咏も大阪府大竹西遺跡の刃関双孔鉄剣を評価する中で、韓半島南部の刃関双孔鉄剣を取り上げ、韓半島から輸入された可能性を指摘したが、このことからほかの列島出土例も舶載された可能性が示唆される（김도영 2019）。

このように、日本列島の刃関双孔鉄剣の中に双孔を穿たれた状態で韓半島南東部から舶載されたものが含まれている可能性が提起されているが、日韓出土資料の比較研究がほとんどなされておらず、韓半島出土例が少数である点や列島における刃関双孔鉄剣の出現が韓半島のそれより遡る点が指摘されているに過ぎない（森本 2007、杉山 2020）。そこで本稿では、金海大成洞 1 号墓の出土例の評価を中心に刃関双孔鉄剣の舶載説を検討したい。なお、以下では「刃関双孔」を銅剣研究に倣って「関部双孔」（吉田 2012）と呼称することとする。

2. 鉄剣の分類

前稿では、弥生時代から古墳時代前期前半の北部九州における鉄剣生産の実態を明らかにするため、製作技術レベルの高低に左右される鉄本体の厚みや身部横断面形態を中心にその形態的変遷を検討した（ライアン 2021）。鉄剣の身部厚 5 mm 台、茎厚 4 mm 台までのものを「薄手」、それより厚いものを「厚手」と大別した上で、身部横断面形態の分類と合わせ、「薄手凸レンズ形鉄剣」（「薄丸鉄剣」）、「薄手菱形鉄剣」（「薄菱鉄剣」）、「厚手凸レンズ形鉄剣」（「厚丸鉄剣」）、「厚手菱形鉄剣」（「厚菱鉄剣」）の 4 つの類型を設定した。また、鉄剣の長さに基づく分類では、全長 20 cm 未満を短剣Ⅰ式、20 ～ 30 cm 未満を短剣Ⅱ式、30 ～ 40 cm 未満を短剣Ⅲ式、40 ～ 50 cm 未満を短剣Ⅳ式、50 cm 以上を長剣とした。関幅についても、3 cm を境に細身と広身に分け、茎長は 7 cm 未満を短茎、7 cm 以上を長茎とした。

3. 大成洞 1 号墓（慶南）出土鉄剣

金海大成洞 1 号墓（慶南文化財研究院 2013）から出土した鉄剣は関部双孔鉄剣の舶載説を考える上で示唆的であるため、ここではその様子を確認しよう。なお、本稿で取り上げる大成洞 1 号墓の発掘調査成果は 2013 年に慶南文化財研究院より報告されたもので、2000 年に慶星大学校博物館より報告され、4 世紀末頃の金海の王墓として注目されてきた大成洞 1 号墓と区別するため、以下では「大成洞 1 号墓（慶南）」と呼称しておく。

大成洞 1 号墓（慶南）は、土器から李盛周編年（李盛周 1999）のⅡ－2b 段階からⅡ－3 段階、すなわち 3 世紀前半頃に位置付けられる木槨墓である⁽¹⁾。数多くの鉄器が検出されているが、245 本以上の鉄鏃と 3 本の鉄剣（図 2－11～13）はとくに注目に値する。11 は全長 35.4 cm、

1. 大安里 16 号 2. 隍城洞 63 号 3. 道溪洞 11 号
 4. 下垓 23 号 5. 中山洞 44 号 6. 道溪洞 27 号
 7. 道溪洞 27 号 8. 福泉洞 145 号 9. 下垓 43 号
 10. 下垓 2 号 11-13. 大成洞 1 号

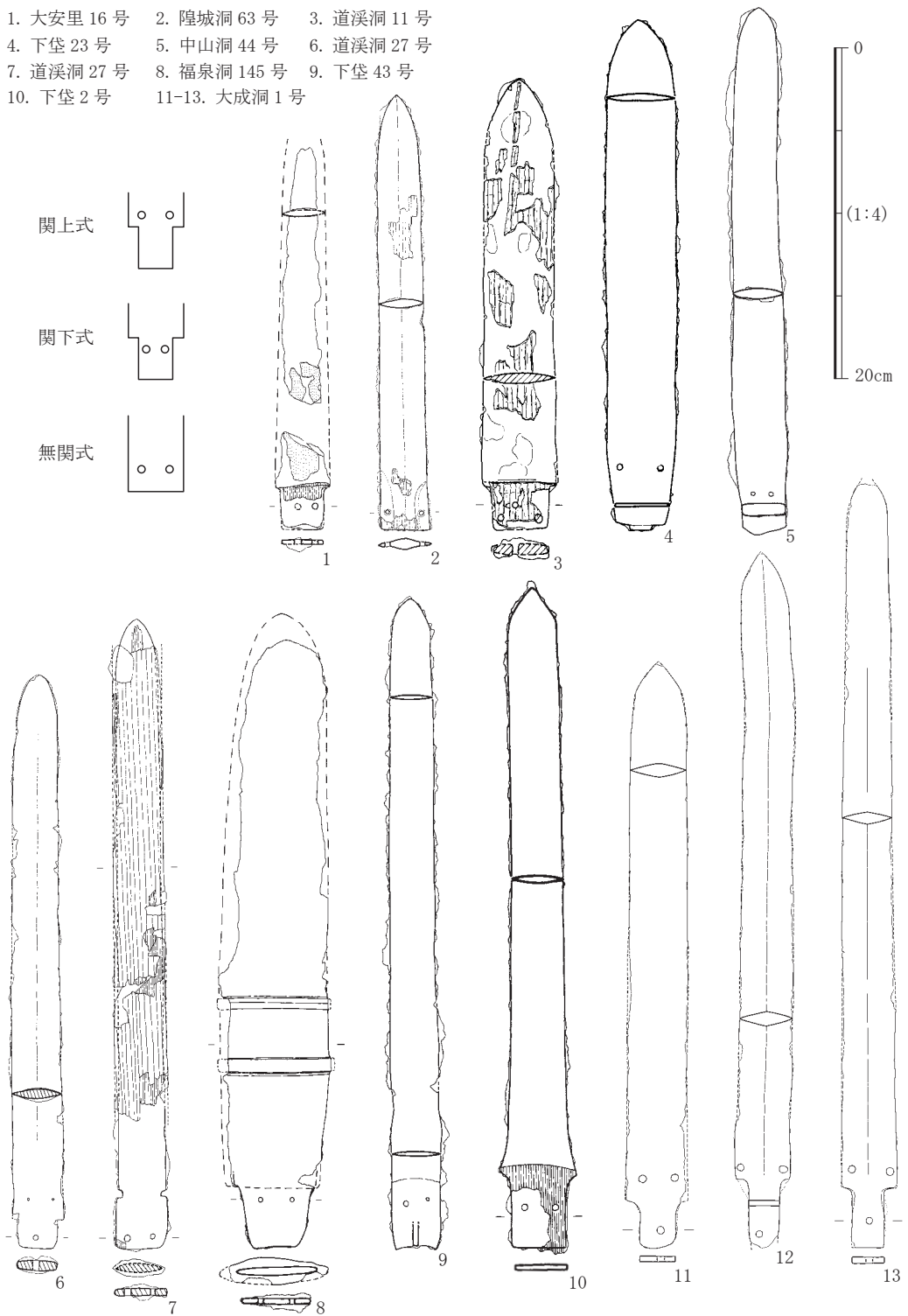


図2 韓半島出土関部双孔鉄剣の諸例

関幅 3.5cm、12 は残存長 42.1cm、関幅 3.3cm、13 は残存長 46.2cm、関幅 3.3cm を測る。いずれも厚みが 7～8mm 台を測る菱形の横断面形態として報告されており、一見重厚な印象を与える。ただし、茎はいずれも 3mm 台の極めて薄い長方形として表現されていることに注意が必要である。通常、鉄剣の身部厚と茎厚との間に顕著な差異がないため、また報告書掲載写真を見る限り、遺存状態が良好でないため、身部厚は銹化の影響を受けていると思われる。

以上を踏まえ、北部九州の鉄剣を対象に設定した分類に当てはめると、広身の薄菱短剣のⅣ式が 2 本、Ⅲ式が 1 本出土したことになる。出土土器は上述した通り、李盛周編年のⅡ－2b 段階からⅡ－3 段階頃に相当するが、北部九州のⅠB 期、すなわち弥生時代終末期新相を中心とした時期に併行する（久住 2015）。対岸の北部九州において薄菱短剣が盛行する時期と一致することから、列島出土の薄菱短剣が韓半島から舶載された可能性が浮上する。しかし、後述するように、むしろ北部九州で製作された薄菱短剣が韓半島へ運ばれた可能性が高いと考える。そこで、大成洞 1 号墓（慶南）出土鉄剣 3 本ともに穿たれている関部双孔に注目したい。

4. 関部双孔鉄剣の日韓比較

関部双孔は従来孔の数や配置を中心に分類されてきたが、本稿ではとくに双孔の穿たれた位置に注目し、関より上に穿たれているものを「関上式」、関より下に位置するものを「関下式」、明瞭な関をもたないものを「無関式」とする（図 2 左）。

韓半島では鉄剣が数多く確認されているが、双孔をもつ鉄剣は、基本的に韓半島南東部の嶺南地域に限られるという地域性をみせる（図 2）。X線撮影の普及に伴い、出土例が今後増える可能性があるが、筆者が確認できた無関式は、昌原道溪洞 27 号墓、蔚山中山洞 44 号墓、慶州隍城洞 63 号墓、蔚山下垵 43 号墓から出土した 4 例である。関下式は、昌原道溪洞 11 号墓、釜山福泉洞 145 墓、蔚山大安里 16 号墓、蔚山下垵 2 号墓から出土した 4 例である。また関上式と評価しうる資料は、可能性のある資料を含めて昌原道溪洞 27 号墓、蔚山下垵 23 号墓、そして大成洞 1 号墓（慶南）から出土した 5 例である。

無関式の資料は、鉄本体末端が不整形なもの（下垵 43 号墓例、中山洞 44 号墓例、隍城洞 63 号墓例）、茎に相当する部分の横断面形態が身部のそれと同一であるもの（隍城洞 63 号墓）、身部両側に挟り込みを入れるもの（道溪洞 27 号墓例）がみられることから、無関式の双孔は、欠損した鉄剣身部を再加工するにあたって施される目釘孔という可能性がある。

関下式も、装具に隠れる茎に孔が穿たれるため、装具の着装を強固とする並列の目釘孔と思われるが、いわゆる合口式の装具との対応が考えられる。ここで下垵 2 号墓例を取り上げたい。本資料の関は、大きく左右に張り出すが、こうした突出関は鉄剣ではなく、長身形鉄鉞に特徴的である。また鉞が突起状を呈する点、茎の横断面が非常に薄い板状である点も長身形鉄鉞と

共通する特徴である。したがって、下埜2号墓例は、鉄銚の再加工品の可能性が高いと考えたい。

最後に、関上式について考えてみよう。明瞭な関上式は大成洞1号墓（慶南）の3例のみであるが、昌原道溪洞27号墓例と蔚山下埜23号墓例もその可能性がある。道溪洞27号墓例は、両側の関が大きく欠損しており、再加工のために穿孔された可能性もあるが、関上式の可能性がある資料として挙げておく。また、下埜23号墓例は、鉄本体末端に幅の狭い突起が実測図で表現されているが、欠損した茎だとすれば、二つの可能性が浮上する。①欠損する前の穿孔であれば、関上式となるが、②欠損した後の穿孔の場合は、着装のための再加工との解釈も可能となる。一方で、関付近の身部厚が2mmと極めて薄い板状を呈するが、通常の鉄剣と異なり、むしろ無関の鉄剣を彷彿とさせるため、実物を観察し突起の正体を確認する必要がある。

次は日本列島の資料との比較をしてみよう。まず、列島で関部双孔をもつ鉄剣は、ヤリに転用された資料（豊島2010）を除き、弥生時代中期後葉から古墳時代前期初頭まで約100本確認され、X線撮影の普及により、ますます増加していく傾向を示す。これに対して韓半島の関部双孔鉄剣が少数に止まることがまず確認できる。また、列島の関部双孔鉄剣は、弥生時代中期以降継続的に認められる事実に注意が必要である。最古の関部双孔鉄剣は、福岡県吉武遺跡樋渡地区墳丘墓K61号甕棺墓例や福岡県東入部113号甕棺墓例などのように弥生時代中期後葉に位置付けられる。関部双孔銅剣の最古例が、中期初頭に位置付けられる福岡県小倉城二ノ丸家老屋敷跡から出土した細形銅剣（吉田2012）であるように、関部双孔銅剣は、同様の特徴を持つ鉄剣より大きく先行して出現したことがわかる。したがって、日本列島における関部双孔鉄剣は、中期初頭以来、維持されてきた銅剣の伝統を受けて成立したものと推察できる。

韓半島出土例の時期はどうであろうか。隍城洞63号墓以外はいずれも土壙木槨墓であり、金海良洞里162号墓などの初期大型木槨墓は、2世紀中葉を上限する李盛周のⅡ-1a期（李盛周1999）に出現するが、李盛周のⅡ-1a期が列島の弥生時代後期後葉頃に併行する可能性が高い（久住2015）。また、隍城洞63号墓は木棺系木槨墓であり、この墓制が2世紀前半から3世紀後半まで継続する（東國大學校慶州器用博物館2002）ため、上記の年代より大きくは遡らないであろう。以上を踏まえ、韓半島出土の関部双孔鉄剣は基本的に木槨墓出現前後、すなわち2世紀中葉頃以降に認められる。

また、双孔の穿たれた位置についても両地域間で差異がある。韓半島では無関式および関下式が目立つのに対して、日本列島は圧倒的に関上式が主体を占める。上述したように、列島では約100本の関部双孔鉄剣が認められるが、可能性のある資料を含めて筆者が確認できた限り、無関式が6本、関下式が1本を数える程度である。唯一の関下式は静岡県文殊堂遺跡出土例であるが、非常に浅いナデ関を有するため、再加工された可能性が示され、無関式に極めて近い。すなわち、韓半島でみられるような顕著な関をもつ関下式は、管見による限り、認められない。さらに、韓半島では明瞭な関上式に限られた存在であることも指摘できる。

このように、両地域で志向される穿孔箇所が大きく異なることなどから、日本列島の関部双孔鉄剣が韓半島から舶載された可能性が低いといわざるを得ない。日本列島出土鉄剣の鉄本体が舶載されたとしても、双孔の穿孔は日本列島内において行なわれたとみるべきである。以上を踏まえ、大成洞1号墓（慶南）の3本の関上式の関部双孔鉄剣は韓半島よりも、むしろ日本列島の資料に酷似するといえる。次には比較材料となる佐賀県中原遺跡の鉄剣を確認しよう。

5. 中原遺跡の鉄剣

佐賀県唐津市中原遺跡では、弥生時代終末期に位置付けられる鉄剣が5本出土している（小松ほか編 2012）。ST13415 墳丘墓の主体部とその周溝の中に位置する埋葬施設から鉄剣が1本ずつ出土している（図3）。また、墳丘墓のすぐ南東に位置するSP13230 木棺墓とSP13231 木棺墓からも鉄剣が1本ずつ検出されている。いずれも埋葬施設の主軸が概ね統一されており、またSP13231 木棺墓とST13415 墳丘墓の周溝が隣接することから、互いに密接に関連していると考えられる。さらに、北へ約50m離れたSC12092 石棺墓からも鉄剣が1本出土している。

中原遺跡から出土した5本の鉄剣（図4）の法量や特徴を確認しよう。全長41.1～46.2cmの薄菱短剣Ⅳ式が4本、33.1cmの薄菱短剣Ⅲ式が1本であるが、その関幅は3.0～3.8cmと広身である。茎長も、1.9cm～4.2cmを測り、いずれも短茎である。少し離れたSC12092 石棺墓例を除いた4本の鉄剣には、関上式の関部双孔が穿たれている。このように、薄い菱形の身部横断面をもつこれらの鉄剣は形態に強い共通性をみせるため、同様な背景で生産された可能性が高いと考える。実際、中原遺跡では、高温鍛錬鍛冶、低温鍛錬鍛冶、古鉄再生などが確認され、「自家消費量を遥かに越える」鉄器の大量生産が指摘されており（土屋 2014）、鉄製武器が生産されていた可能性も提起されている（ライアン 2021、立谷 2022）。中原遺跡で生産されたかどうかはともかくとして、弥生時代終末期になると薄手短剣が大きく増加する（ライアン 2021）ことを勘案すると、北部九州で生産された蓋然性が高い。中原遺跡出土例を含

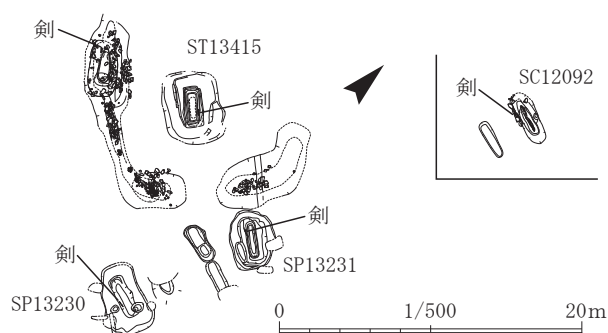


図3 中原遺跡の鉄剣出土遺構

む北部九州でみられる関上式の薄菱短剣に酷似する鉄剣が大成洞1号墓（慶南）から3本まとまって出土している背景については、北部九州より入手されたか、その製作に北部九州と深い関係にある工人が関与していた可能性が想定される。すなわち、「倭系遺物」と認定できよう。

1. ST13415 墳丘墓主体部 2. ST13415 墳丘墓周溝内埋葬施設 3. SP13230 木棺墓
4-5. SP13231 木棺墓（5は関を水平にして再実測したもの）
6. SC12092 石棺墓

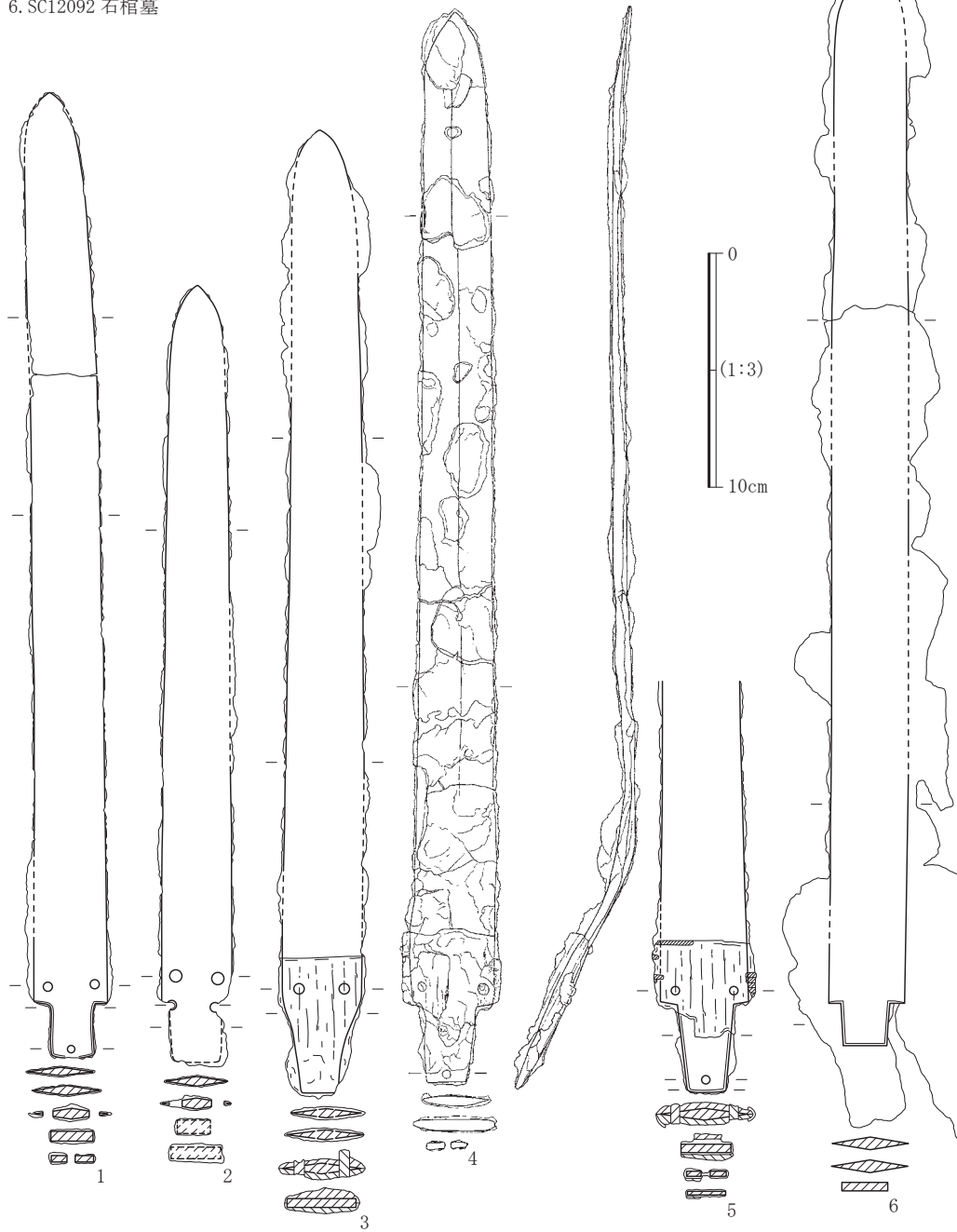


図4 中原遺跡出土鉄剣

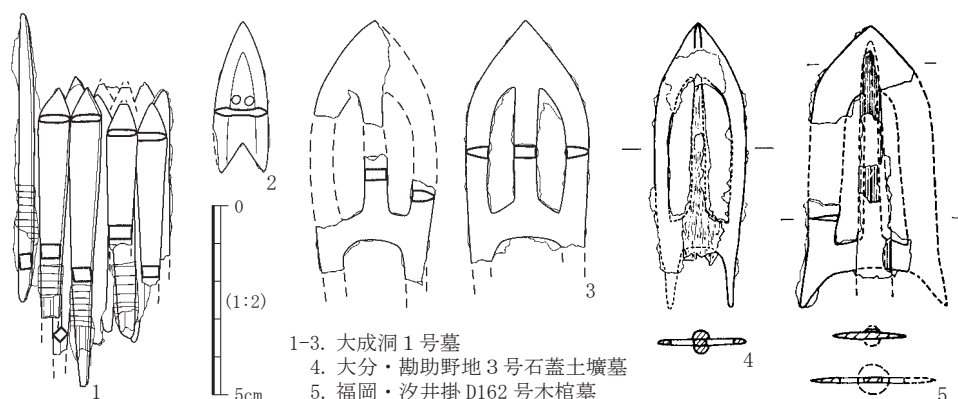


図5 大成洞1号墓（慶南）出土鉄鏃と類例

6. 大成洞1号墓（慶南）の鉄鏃

大成洞1号墓（慶南）の鉄剣が列島出土鉄剣の系譜上に乗る可能性を指摘したが、共伴遺物の中に倭系鉄鏃も含まれていることにも注意が必要である。230本以上の細根系圭頭鏃（図5-1）や15本の無茎三角鏃（図5-2）は韓半島南部で広く認められる型式である。一方で、2本副葬された大きな透孔をもつ平根系無茎三角鏃（図5-3）は韓半島では類例に乏しいのに対して、対岸の北部九州では類例がほぼ同時期に認められる（図5-4・5）。2本単位の副葬も列島の平根系鉄鏃に広く認められる習俗（鈴木2004）であることも示唆的であり、上述した倭系鉄剣の推定を補強するものとなろう。また倭系の杏仁形透孔付鉄鏃（大澤2006）が大成洞墳墓群だけでも29号墓や88号墓、同墳墓群に含まれる龜旨路18号墓に加え、1号墓（慶南）に近接する4号墓（慶南）からも2本出土しており、継続的な交流が示されている。

7. 結 論

韓半島の鉄剣にも双孔が少数認められることから、列島の関部双孔鉄剣の中に韓半島から舶載されたものが含まれている可能性は以前提起されたが、その可能性はほとんど検証されてこなかった。本稿では、日韓出土資料の比較検討を行なった結果、両地域間で主体的に穿たれた双孔位置が大きく異なることから、双孔の開けられた状態で鉄剣が舶載された可能性は低いと指摘した。列島の関部双孔は関より身部側に施されることから、いわゆる呑口式の装具を着装するための目釘孔である（図4-3・5）のに対して、韓半島の双孔は無関式や関下式が多く、再加工品を中心に施されることから、必要に応じて合口式の装具を着装あるいは付け替えるためのものであるという背景に起因すると考えられる。言い換えれば、前者の大半の資料が製作

当初から計画されたもので、後者が二次的に工夫されたものであろう。その意味では、穿孔箇所が異なるにしろ、韓半島出土例は東日本の再穿孔された事例と共通する側面があるといえる。

韓半島の大成洞1号墓（慶南）から、列島の関上式の関部双孔鉄剣に酷似する鉄剣が3本出土したが、列島に類例が求められる鉄鏃が共伴する点を考え合わせると、倭系遺物の可能性が高いと考えた。列島から移入されたものと考えた場合、その移動した背景が問題となってくる。弥生時代の関部双孔鉄剣が古墳時代前期のヤリに転用された事例がある（豊島 2010）ことに加え、ヤリの生産・流通に初期ヤマト政権が深く関与していると考えられるため、弥生時代終末期新相から古墳時代前期初頭頃に併行する本例も、ヤマト政権から贈与された政治的器物である可能性がまず考えられるところである。実際、大成洞1・2・13・18・23号墓などから一定量の倭系ヤリが出土している。しかし、木製装具が残存しないため、実物そのものからは判断し難いが、共伴する鉄鏃が北部九州に偏在することや本例が倭系ヤリの韓半島出土例に大きく先行することを勘案すると、ヤマト政権ではなく、北部九州との関係が考えられよう。

本稿では、関部双孔鉄剣の比較検討を行なったが、今後は刀剣、ヤリ、鉄鏃を中心とした日韓出土武器の更なる系統的整理を深めることにより、当該期の重層的な日韓交渉の実態がより高解像度に把握できるだろう。

謝 辞

本稿を執筆するにあたり、次の方々・機関からご高配とご教示を賜った。記して謝意を表したい。
久住猛雄 立谷聡明 趙晟元 中村大介 平井洸史 佐賀県文化財調査研究資料室

註

(1) 土器の時期について趙晟元氏と久住猛雄氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げる。

引用文献

【日文】

- 池淵俊一 2003「刀剣・矛・戈・ヤリ・素環頭刀」『考古資料大観』7 小学館、東京：pp. 167-172
池辺元明（編）1980『若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告』第2集 福岡県教育委員会、福岡
大澤元裕 2006「杏仁形透孔付鉄鏃の特質と展開」『古文化談叢』第55集 九州古文化研究会、福岡：pp. 101-127
大庭康時 1986「弥生時代鉄製武器に関する試論—北部九州出土の鉄剣・鉄刀を中心に—」『考古学研究』第33巻第3号 考古学研究会、岡山：pp. 94-106
小松 譲ほか（編）2012『中原遺跡』VI 佐賀県教育委員会、佐賀
久住猛雄 2015「『奴国の時代』の暦年代論」『新・奴国展』福岡市博物館、福岡：pp. 186-195
渋谷忠章ほか（編）1988『勘助野地遺跡』大分県教育委員会、大分

- 杉山和徳 2020「東日本の刃闘双孔鉄剣」『日々の考古学』3 六一書房、東京：pp. 89-100
- 鈴木一有 2004「平根系鉄鏃の諸相」『古代武器研究会』Vol. 5 古代武器研究会、滋賀：pp. 36-46
- 立谷聡明 2022「唐津・中原遺跡における鍛冶関連遺物の再検討」『七隈史学』第24号 七隈史学会、福岡：pp. 174-155
- 土屋了介 2014「中原遺跡出土鉄製品・鉄片に関するまとめ」『中原遺跡』Ⅷ 佐賀県教育委員会、佐賀：pp. 422-437
- 豊島直博 2003「弥生時代の鹿角装鉄剣」『東国史論』第18号 群馬考古学研究会、群馬：pp. 13-26
- 豊島直博 2010『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房、東京
- 野島 永・高野陽子 2002「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓（3）」『京都府埋蔵文化財情報』第83号 京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都：pp. 25-36
- 森本幹彦 2007「K248から出土した弥生時代の鉄製長剣について」『千原台ニュータウン』XVII 都市再生機構・千葉県教育振興財団、千葉：pp. 215-220
- 吉田 広 2012「小倉城二ノ丸家老屋敷跡出土の銅剣」『小倉城二ノ丸家老屋敷跡』2 北九州市教育委員会、福岡：pp. 197-216
- ライアン・ジョセフ 2021「弥生時代の北部九州における鉄剣生産の再検討」『考古学研究』第68巻第1号 考古学研究会、岡山：pp. 31-52

【韓文】

- 李盛周 1999「辰・弁韓地域 墳墓 出土1～4世紀 土器の編年」『嶺南考古学』24 嶺南考古学会、韓国：pp. 1-55
- 蔚山大學校博物館 2002『蔚山大安里遺蹟』蔚山大學校博物館、韓国
- 蔚山文化財研究院 2009『蔚山中山洞古墳群』蔚山文化財研究院、韓国
- 김도영 2019「원삼국~삼국시대 철제도검의 제작기술과 그 의미」『考古廣場』25 부산고고학회、韓国：pp. 61-91
- 慶南文化財研究院 2013『김해 대성동유적』慶南文化財研究院、韓国
- 東義大學校博物館 1996『昌原道溪洞古墳群』東義大學校博物館、韓国
- 東國大學校慶州캄퍼스博物館 2002『陞城洞古墳群』東國大學校慶州캄퍼스博物館、韓国
- 釜山廣域市立博物館福泉分館 1999『東萊福泉洞古墳群』釜山廣域市立博物館福泉分館、韓国
- 釜山大學校博物館 1997『蔚山下垈遺蹟—古墳Ⅰ』釜山大學校博物館、韓国

挿図出典

- 図1：筆者作成／図2：1. 蔚山大學校博物館 2002 2. 東國大學校慶州캄퍼스博物館 2002 3. 豊島 2010 4・9・10. 釜山大學校博物館 1997 5. 蔚山文化財研究院 2009 6・7. 東義大學校博物館 1996 8. 釜山廣域市立博物館福泉分館 1999 11～13. 慶南文化財研究院 2013／図3：小松ほか編 2012を改変／図4：1～3・5・6. 筆者実測 4. 小松ほか編 2012を一部改変／図5：1～3. 慶南文化財研究院 2013 4. 渋谷ほか編 1988 5. 池辺編 1980